

(一) 今假りに話を組立てる臨畫を線であるとするば、必要な線だけでも成立するようにしたい。

(二) 話の筋が、主人公を中心として進んで行く様でありたい。

(三) 一つの話の中に二つの筋が出て来る時は、その二つが竝行してはならぬ。必ず主副があらねばならぬ。

以上述べた所を要するに、話は之を選択せんとする場合に、一方に偏せず、多方面からの顧慮を忘れてはならぬのである。また兒童の内存的興味や心的發達のそれ々の階段や、藝術としての形成美、内容美を標準として童話を選択しなければならぬといふことになる。

見たま、

五つ位の男の子が叔父さんらしい人につれられて電車にのつた。早速に今買つて来た玩具の包みをほどいて内部をあらためてゐる。

その顔の輝き……玩具はセル・イド製の軍艦。その中電車が混み合つて来たのでその軍艦を箱におさめた。叔父さんは他の買物と一緒に無雑作にそれを風呂敷包みに入れようとする。と、子供の兩の手はしつかりその箱にしがみついた。眼からは雨がふりさうになつた。頭は横にふつてゐる。

「さあ叔父さんが持つて行かう。こんな大きな箱、坊には持てないよ」かういばれて、子供はま……かたく箱を抱いてしまつた。成程大きな箱であつた。混み合つた電車で、小さい子が、からだの半分もあらう箱を抱いてよろけてゐるのはあぶなく見える。しかしこの子の愛者によい、手放せないのである。叔父さんの催促がゆるむとこの子は、箱の蓋をそうつとあけて内部をのぞいてゐる。いかにもうれしそう。そのうれしいまゝの顔で叔父さんの方を見やうとすると、叔父さんは思ひ出したように、

「さあ、おだし、わからない坊やだねえ」といふわからない坊やは、だまつてそのまゝ急いで窓の方をむいてしまふ。再び箱をのぞいてさもわかつたといふ様に一人合點して、誰かにそのうれししい心持を應へてもみたいのか、乗合せた人々の方へ、ニコニコ顔をむける。

電車は走つてゐる。ガタンとひどくゆれてその大きな箱が叔父さんによつかる度にその坊やは叔父さんから頬ばされてゐる。